

私達は此國の統計資料を本にして判断してゐるつもりで
あるが、佐伯の人の話では、どうもお国自慢の異いかし
て楽成が濡かないやいた。
犬も歩けば棒に当たるやうなところか、私を満足させて
くれた二つの話しかあった。

一つは、長い夏休みも終つたといふ八月二十七日の出来事である。前日の二十六日の夕方、港とぶらついてい
た私は、税関の役人から、明日午後一時、石川港に碇泊
中の紀洋丸（一萬三千トン、太平洋通運株式會社（佐伯）に所属す
るか）と何かと促された。早速同僚と生徒とをとい、九
人で約束の二十七日午後一時、税関の小船から本船に近
づき、高いタラップを踏んで乗りこんだ。一等航海士と
税関の役人と中心に、私達は船長室のテーブルを囲んで
やかてボーイは左舷のオレンジジュースに、や、問をお
いてメロンを一人一人の前に置いた。一等航海士は、今
アメリカでさかきメロンです。どうぞお上り下さいとい
うので、私達は質問を要求した。

「佐伯の港の特徴は何んですか」と私が聞いた。
「よい港です。いつも波静かで、波浪があるとこは作
業は困難です」と一等航海士は答えた。

「軍が手に入れたのも無理はないです」と、ホントにいい
港です。かえりやうに税関吏が言った。
あつたこれだけの返答であつたが、二人の顔と言葉が
ら、私には非常な重みを持つて聞こえた。

今一つは、九月十三日土曜日、港にある検査部を訪ね
た際、二人の係官に同じ質問を發した。係官は
「波静かです。私は過去五年所勤務地を勤めま
したが、こんな静かな港は初めてです」と、とくに冬波が高
くて仕事ができにくいものです。今まで一回も検査旋
回でまわつて波が荒れて困つたことはありません」と、もう

二人の係官も何回と多く肯づいてゐた。鶴見半島の先端
にある大島と浦戸の岬に分け、お大なる湾奥に、紐島行きの
大型船が風よけ、波よけに碇泊してゐることもあるや
うな話も聞いた。

波浪が少く作業がしやすいこと。湾奥が広く深く十米
以上もあるので、大型船が心配なく湾奥に入りこめる
こと。干満の差が小さいので、小船でも大型船でも碇岸
や繫留、進水に便利が良いこと。

佐伯の港が天然の良港であると自他共に許すことが出
来るのは、主として右の條件がそろつてゐるからである。
(以上)

採訪記

國東半島に併設文化を訪ねて

―バスによる秋の現地研習の旅の記録―

幹事 羽 柴 弘
（佐伯） 吉 田 雅 雄

十一月三日、文化の日。氣にしていた天候も追々晴れ、
午前七時佐伯駅前を出発したバスは、次々と今日の冬期
者をのせて國道十号線に出る。一行四十九名會員外が三
分の二、婦人が十数名、大型バスなれば身体も楽であ
る。大分、別府を経て午前九時半立石着、ここで伊東、
大岩両氏に迎えられる。その御案内をいながら、馬上八
幡社の境内にある諸方惟栄を祀る石の祠にまいる。

諸方惟栄は佐伯氏の祖先、上州沼田の配流を解かれて
佐伯に帰る途中、馬上に急死されたと伝えられる悲運の
人。その最期の地点の伝承などを両氏にお話をきく。馬
上八幡社は社殿も大きく境内もなく、なまの老木などあ

リ、怒き足なかり心惹かれるものがあった。

馬よ上てふ名は碑の由来杉落葉

長良子

バスは国道から古に入り、峠を越して豊後高田市西に
出る。熊野磨崖仏は所要時間の閑像で断念、まっすぐ
に真水大堂に出る。

萱葺のものと大堂は横に移され、立派な鉄筋コンクリ
ート建築の收藏庫の中に、防護防火は完全に、明るく軒
下れるのほむしりありがたい。本尊阿彌陀如来の端正な
お姿、両脇に祀る不動明王と大威徳明王その外、国宝級
の仏像九軀が一堂に並んでいらつしやる。

秋ふかき真水大堂の併たち

長良子

一同は再びバスに乗り、田舎の野を過ぎ山を横切つて
次の富貴寺に向かう。バス窓から、はるかにはその境内
の椿の黄葉していろのが目にうつる。ゆがてバスは寺の
下の停車場につく。

登る石段も、その両側の石段も仁王像など宿をびて、
この寺の歴史の古さを先ず物語る。打ち仰ぎ見る富貴大
堂即ち方形造りの阿彌陀堂は、昨年秋に訪れた神角寺の
本堂に見まかうばかりで、神角寺のひたひた昔ききかあり
にこれに匹敵する。この大堂と中の仏像、壁画、境
内のもろ／＼の石造美術品は平安後期までさか／＼あるも
のであるが、この日は生憎く今回費を投じて仏像の修理
で、いよいよ本尊不坐、そのかありに今復舊壇の壁面模
写が行われていると目のあたりで見ることが出来た。
境内の国東塔、立ち並ぶ笠塔婆や板碑なども併せて、
この寺の示す仏教文化に圧倒されるばかりである。

银杏散る古き御堂の壁面模写

長良子

時計はすでに十一時を半ばまわっている。しかし見学
はまだ大半残つていゝのでバスは引かえし、中村から高
田に出て、に入り、半島を西から東に横切る次のコ
ースに入る。屋山の峯と行く手から左に、そして後にし
つつ谷をのぼる。

屋山てふ裏表なき山も秋

長良子

午後一時半、ゆつと冷水峠に出る。空腹を辛抱してい
たこととて先ず登食、でんでに芝草の上に坐を占め、す
ばらしい景観を前にしなから弁当を開く。幸い風もなく
うね／＼と打ち広がる国東の山並が、はるかには由布鶴
見、そして別府湾から佐賀の関半島、四國の山々が西か
ら南へ、東北の方両方山は近く、杉木立が透つて見えな
いが、さつき仰ぎ見て来た屋山が北の方には低く、その向
うには宇佐平野が広がって見える。

国東の秋の山並見て登鶴

長良子

秋山の果て雲跡の由布鶴見

同

峠と下つてバスは安岐町に入る。両子寺は近かつたが、
狭い山道へそれでも果道、車は難合にとんだひまがかり、
午後三時やつと目指す両子寺のすぐ下の駐車場にバスが
着く。

写真で見ていた護摩堂の大屋根を越して両子の峯が近
く、その八の合目の紅葉が美しく仰がれる。時刻は閑像
が参拝の人の群が多く案外な雑踏、西安政中学校の小川
先生が御案内下さり、美しく照つた紅葉の下をくぐり、
奥の院への谷間の道をたどり、両子山々不思議なごま
おなから歩く。幽静に限りないこの両子寺、しかし正面
の本堂のあるべき位置に、国民宿舎の大きな新しい建物
があるのはいたたきかねた。

